危機の時代と〈都市論〉
――亡命者ベンヤミン（「パリ神話」研究Ⅱ）――

今橋映子

1　亡命者ベンヤミン
2　『パサージュ論』の歴史哲学
3　遊歩と街路の詩学

1　亡命者ベンヤミン

一九三〇年代のパリを、亡命地という観点から見る時、この歴史長き〈自由の都〉は、外国人知識人や芸術家たちにとって、決して約束の地とはなり得なかった[1]。その第一の要因は、三十年代初頭から深刻化した経済の大不況、そして第二には、三三年ヒトラー政権成立後、外国人やコミュニストたちに対して行なった法的規制や、ナチス占領時代におけるヴィシー政権の外国人排斥など、フランス政府が意図的に選択した政策を、挙げねばならない。そしてさらに第三の要因としては、特に反ナチス亡命者たちにとって、オランダやオーストリアなどと違って、フランスには、しょせんドイツ語で通用する市場など存在しなかったという点が大きい。パスポートもビザもなく、寄って立つべき亡命雑誌すら廃刊に追いこまれていく状況の中で、彼らは、今や連絡の絶たれた祖

国に向って語ることもできず、さりとて、全く異なるフランス文化や社会の一員になることもできず、次第に自己表現の場を失っていったのである。

「祝祭と狂乱」の一九二〇年代に、多くの外国人芸術家たちを受け容れ、エコール・ド・パリの画家たちをはじめとするそうした外国人たちの仕事によって、自らの文化を豊かにしてきたパリは、三〇年代に入ってその寛容の精神を失っていった。しかも時代と芸術は、反ファシズムとコミュニズムを軸とする政治の季節へと、確実に移行していったのである。

それではそのような時代にあって、パリは外国人芸術家たちにとって、苛酷な亡命地、あるいは不毛の都市でしかなかったのであろうか——。従来、三〇年代の文学史あるいは芸術史にあっては、〈政治参加〉の様相が中心に記述されてきたために見落されてきたが、実はこの時代、貧困に苦しみながらも、あえて政治参加を拒否し、パリという街そのものを放浪し、汚濁のなかから自己の表現形式をつかみとった一連の外国人芸術家たちが存在していた[2]。

自由の都、芸術の都という〈パリ神話〉があえなく崩壊したのが、三十年代というならば、一方で、パリという都市そのものが、驚くべき共通点によって表象されたのも一九三〇年代なのであった。彼らの多くは、一時代前のエコール・ド・パリの画家たちのように、おそらく互いの存在を知ることもなかったし、また芸術上の影響—受容関係にあるわけでもなかった。にもかかわらず、彼らが文学、絵画、写真などのメディアで生み出した一九三〇年代の映像——ことにパリの映像には、驚くほどの類縁性が認められるのである。それは、苛酷な現実の中に咲き出た新たな〈パリ神話〉とも呼べるだろう。

本論でとり上げるヴァルター・ベンヤミン（一八九二—一九四〇）は、その未完の大著『パサージュ論』（一九三五—一九四〇）によって、三〇年代の外国人芸術家たちが共通してとらえた「貧困と街路の詩学」を、誰よりも鋭く言語化した第三帝国亡命批評家である。シャルル・ボードレールという特定の人間とその仕事、さらには彼の生きたパリという第二帝政期の首都を引用の織物によって語るという試みの中で、ベンヤミンは単なる〈過

去〉の都市ではなく、自分の生きた一九三〇年代という危機の時代のパリをも語ることに成功している。しかもベンヤミンが「パリ――十九世紀の首都」を分析するにあたって編み出したキイ・ワードや、方法論、歴史哲学は、一九九〇年代現在の〈都市論〉の土台そのものでもある。

近年『パサージュ論』の邦訳刊行が完結して、ますます様々な方面から注目されているベンヤミンのパリ論ではあるが、本論では、あくまでも一九三〇年代という危機の時代に、一人の亡命者としてパリに降り立ち、誰よりも苛酷な運命の中でついに自死へと追いやられたベンヤミンが、なぜ、そしていかに〈都市論〉を生み出したのかに、改めて注目したい。それによって彼の都市論が、同時代にパリにあって、（ベンヤミンとは相知ることもなく）驚くべき共通の視点と詩的な直観によってこの都市を描き出した他の芸術家たちにとって、あたかも〈方法論序説〉のごとき性格をもっているという事実が、彼の精妙な引用や記述と共に、浮かび上がってくるはずである。

*

停車場でなかまたちからオサラバしろ
朝、きちんと服を着て市街へはいれ
ねぐらを探せ、そしてなかまがドアを叩いたら
開くな、おお、ドアを開くな
開かずに
アトをくらませ！
（……）

何をいおうが、それを二度とはいうな
きみの考えを他人がしゃべったら、きみの考えとは違うといえ。
署名しなかったやつ、写真をとられなかったやつ
現場にいなかったやつ、口をきかなかったやつ
が、どうしてつかまえられようか。
アトをくらませ！

きみが死のうと思うなら、こころして
墓標を残すな、残せばきみの居場所は明かされる
はっきりした文字がきみの名前を届けでる
そして没年の数字がきみの有罪を証拠だてる。
くどいが
アトをくらませ！

〔と、ぼくは教えられた〕

（ベルトルト・ブレヒト『都市住民のための読本』1より
野村修氏訳、以下同様(3)）

ドイツの批評家ヴァルター・ベンヤミン（一八九二―一九四〇）は、「ブレヒトの詩への注釈」（一九三八？―三九執筆）において、同時代人ブレヒトのテキストを、あたかも古典であるかのように、いいかえれば「精錬されつくした、重大な思想内容をはらんだテキスト」とみなして鋭い注釈を試みている。とりわけブレヒト詩の中

に「純粋に詩的な部分のもつ政治的な内容」を嗅ぎ分けるベンヤミンの感性は、彼自身が置かれていた歴史的状況と、決して無縁ではなかった。『都市住民のための読本』は、ブレヒトによって一九二〇年代後半に書かれ、一九三〇年『試み・第二集』に収められた連作詩集である。注釈が書かれた一九三八年当時、ブレヒトも、そしてベンヤミンも、すでにナチス・ドイツからの亡命生活を五年も強いられていた。ベンヤミンは連作冒頭のこの詩を、こう解釈する。

ある機会にアルノルト・ツヴァイクは、この連作詩は最近になって新しい意味をかちえた、と語っていた。つまり、この連作詩にえがかれた都市は、亡命者が異国で経験する都市と同じだ、というのである。それはそのとおりだ。が、被搾取階級のための戦闘者は自国のなかでの亡命者だ、ということを忘れてはならない。洞察力をもったコミュニストにとっては、ヴァイマル共和国でのかれの政治活動の最後の五年間は、潜在的亡命を意味していた。（一一四頁）

ヒトラー政権成立直前のドイツにおける非合法活動家であれ、そして三十年代の亡命者たちであれ、彼らは、もはや決して自分の「家」とはなり得ぬ大都市の中に、ひそかにすべりこみ、息を殺して生き、そして生の痕跡を残さぬように立ち去っていく。ベンヤミンはこのブレヒトの第一の詩を、さらに第九の詩に連関させている。

9　さまざまな時、さまざまな側からの、ある男への四つの勧め

これがきみの住居だ
持ちものを置いとく場所もある
家具は好きなように置きかえていい
必要なものがあったらいってくれ

これが鍵だ
ここにいたまえ。

この二間にぼくらは住んでいる
きみのために一間とベッドをひとつ空けよう
きみに手伝ってもらえる仕事もある
これがきみの食器だ
ぼくらのとこにいたまえ。

これがきみの眠る場所だ
ベッドはまだ新しい
使うのはきみがふたりめだ。
きみが神経質なら
スプーンをその桶ですすいでくれ
すぐきれいになる
気楽にぼくらのとこにいたまえ。

これがへやよ
急いでね、一晩いてもいいけど
だったらワリマシをもらうわ。
わたしはうるさくないし

病気なんかもってない。
ここでだって、どことも同じにぐっすり眠れるわ。
じゃ泊ってらっしゃい。（一一九―一二〇頁）

ベンヤミンは、この第九の詩に、非合法活動家や亡命者が、貧しい人々と共有せざるを得ない社会過程を読み解いていく。これは「大都市における貧困化とは何か」を、簡潔なタッチで描いている詩だというのである。ベンヤミンの実に細やかで鋭い注釈は次のように続いている。

この男はしだいに貧乏になってゆくのだ。かれに宿を貸すひとびとは、そのことにちゃんと気づいている。かれらはかれに、アト（痕跡）を残す権利をだんだん認めなくなる。一回めにはまだ、かれらはかれ独自のものに注意を払うが、第二の場所では、独自のものとして語られるのは皿だけで、それもかれが携えてきたものかどうか怪しい。宿泊者の労働力は、もう主人側の思いのままにされている（「きみに手伝ってもらえる仕事もある」）。第三の場所に現われた男は、まったく失業者になっているらしい。かれの私的な領域は、錫のスプーンを洗うことで象徴的に描出される。第四の勧めは、どう見ても貧しい客への娼婦の勧めだ。ここでは泊りつづけることなど、もう問題にならない。せいぜい一泊であり、語りかけられた男がどんなアトを残せるか、もういわないほうがましだろう。――第一の詩の指示、「アトをくらませ」は、第九の詩の読者にはこう補完される、アトを抹消されるくらいなら、と。（一二一頁）

「アトを抹消されるくらいなら、アトをくらませ」という指示。ベンヤミンの言う通り、この詩ほど亡命者の〈場所〉を語っているものはない。前論ですでに見たように、亡命とは単なる故国からの不意の追放あるいは逃避ではない。亡命者たちは、亡命先の都市の中で、そのほとんどは職もなく、金もなく、次第に自分の「家」を

奪われていく。その上ブレヒトのこれらの詩は、そうした現実的状況以上に亡命の隠喩的な意味を語っているだろう。つまり亡命知識人や非合法活動家など、亡命地への適合を望まず――あるいは適合を拒否されて――その周縁にとどまった者たちにとって、亡命とはとりも直さず都市における貧困化の過程、すなわち「アト」を残す権利を失っていく過程にほかならなかったのである。

二十世紀の生んだ偉大な批評家の一人として、近年再評価の著しいヴァルター・ベンヤミン。その彼を、一九三〇年代パリを生きた一人の第三帝国亡命者としてとらえ直す時、私はブレヒトの詩に寄せた彼自身の痛切な、苦い思いを再びかみしめざるを得ない。そして実際、一九三三年から四〇年にわたるベンヤミンのパリ亡命生活もまた、「アトを残さず」姿をくらますかたちで、終止符を打ったのであった。

一九三三年三月中旬、ベンヤミンはベルリンからパリへ亡命した[4]。彼はその時四十歳。ベルリンの富裕なユダヤ人家庭に生れ育った彼は、幼年時代からの想い出に満たされた都市に永遠の別れを告げたのだった。前論でも詳しく見たように、ヒトラー政権成立後、特に二月二七日の国会議事堂炎上事件以降、ナチスによる恐嚇政治は迅速かつ苛酷に進行し、もやは抜き差しならぬ事態となっていた。ベンヤミンは三月二十日付の書簡で次のように書いている。

事態の核心をなすものは、個別的なテロルよりもむしろ、文化の総体的状況である。前者については、絶対的に信頼のおけることを聞き知るのは難しい。疑いをいれないことは、ひとびとが夜にベッドから連れ出され、拷問されたり殺されたりするケースが、数多くあることだ。おそらくもっと重要だが、光をあてるのがもっと難しいのは捕えられたひとびとの運命であり、これについては怖ろしいかぎりの噂が流れている。(……)ぼくについていえば、ぼくのなかに、それもやっと一週間まえに、あいまいなかたちで、ドイツを去る決心を急速に発展させたものは、こういう――ずっと前から多少とも予見できていた――状況ではなかった。それはむ

しろ、ほとんど数学的な同時性をもって、およそ言うに足りるすべての個所から原稿が返却され、進行中ない し成約まぎわの交渉が打ち切られ、問い合わせが返事もなしに打ち棄てられたことだった。公認のものにそっくり右へナラエしないようないっさいの態度や表現法にたいするテロルは、考えられうる極限に近づいている。

（ゲオハルト・ショーレム宛、野村訳[5]）

ベンヤミンは、一九二五年フランクフルト大学に提出した教授資格申請論文「ドイツ悲劇の根源」が、そのあまりの難解さゆえに拒否された後は、学界とも文壇とも一定の距離を保ち、年間数十篇の論文あるいは書評を寄稿する批評家として生計を立てていた。その主な寄稿先であった『文学世界』も、『フランクフルト新聞』も、ナチスの文化政策の犠牲となったのは、すでに見た通りである。その上彼は私生活の面でも、一九三〇年三月に離婚、その同じ年に両親を失って、一時は自殺を考えるほど、人生の危機の時代にあった。三三年三月のパリ亡命は、そうした激動の時代の最後に決行されたのである。

ベンヤミンの生涯の友人であり、ユダヤ神秘主義研究の第一人者であるゲーアハルト・ゲルショム・ショーレム（一八九七―一九八二）は、ベンヤミンとの間に交した多数の書簡を編集、公刊している。ショーレムによれば、パリ亡命中のベンヤミンの物質的生計を支えたのは、第一にフランクフルト研究所の援助金、第二に、イタリアのサン・レモに居た別れた妻ドーラの家での丸抱えの長期滞在、そして第三にはデンマーク、フィーン島スヴェンボルのブレヒトの許での、同様の長期滞在であった、と説明している[6]。実際、パリ時代のベンヤミンは、文筆で稼ぐあてはほとんどなく、パリにおいても、（書簡の住所をたどってみると）一九三八年一月にドンバル街十番地の「たった一室の」住居に落ちつくまで、五年間に七、八回も安ホテルを転々とする生活を送っている。

亡命の当初から、彼が一つはっきり認識していたことは、「フランスでフランスの機関のために書いて金を稼ごうなどという見込みもない試みをするつもりはない[7]」ということだった。パリでは「亡命者はドイツ兵より始末に負えない、と言われている[8]」のを、ベンヤミンは報告しており、前論で見てきた亡命知識人たちの状況――

つまりフランスの言論界では、ドイツ人作家たちに活動の場は閉ざされていたということを、改めて裏付けている。ベンヤミンはまた、様々な亡命雑誌や、協会などを通じて集まっていた亡命者たちからも、一線を画そうとしたようである。

> 僕が個人的なことについても簡潔にしか言わないのは、決して検閲を恐れてのことではない。検閲など受けることはないのだから。僕にそうさせているのは、やりきれぬほど重苦しい周囲の状況なのだ。（……）僕はこれまでここでほど孤独だったことはない。亡命者たちと喫茶店で落ち合う機会を求めるなら――それは容易なことだろう。しかし僕はそれを避けている。（ショーレム宛、一九三四年一月一八日、山本尤氏訳[9]）

しかしその一方で、一般の亡命作家たちと異なって、ヴァルター・ベンヤミンが学者であり、批評家、そして殊にフランス語を自在にあやつる人物であった、ということは改めて記憶にとどめるに値しよう。パリ左岸オデオン通りの貸本屋「本の友の家」の女主人であり、ヴァレリー・ラルボー、レオン＝ポール・ファルグなどの若き作家たちの良き理解者、今世紀初頭のパリ文壇の結接点として知られたアドリエンヌ・モニエは、三十年代初頭のベンヤミンについて、数少ないフランス人の友人として優れたポートレートを書き遺している。

> ユダヤ人にしてドイツ人、ワルター・ベンヤミンはまさにそういう存在だった。彼はその両者の特長を兼ね備えており、一方が他方より目立つようなことはなかった。
> その知的な顔立ちからみてユダヤ人であり、賢者の策士ぶりと奇妙な人のよさがまじりあった一種の獰猛さがそこには読みとれた。できるだけなにかのかげにかくれていようとする防禦的な顔立ち。（……）
> ワルター・ベンヤミンがドイツ人であることは、とりわけ彼の身のこなしや話し方から感じられた。生真面目で、当然のことながら非常に礼儀正しく、物腰はいささか儀式ばっていた。訛はそれほどひどくなかった。

彼はフランス語をよく知っており、非常に注意しながら、ほとんど誤りなく話した。まるで言葉をせんさくしながらのように、ゆっくり話を進めるのがつねだった。話し言葉も彼にとって非常に大切なもので、書き言葉と同じくらい念入りに話していることがはっきり感じとれた。（岩崎力氏訳）[10]

パリのベンヤミンを、物質的生活で支えた唯一の源は、フランクフルト社会学研究所の援助金であった。この研究所は一九二四年、ヘルマン・ヴァイルの寄付によって、フランクフルト・アム・マイン大学に設立された私立の研究所である。自ら創設者の一人であり、また一九三〇年に所長に就任したマックス・ホルクハイマーは、ヒトラーの勝利が間近いことを予見し、研究所が私立であることの利点を生かして、三一年に、ジュネーヴとパリに支所を開設して、書物や資産をすばやく疎開させた。のちに同研究所はさらにアメリカに本拠地を移して、ナチズムへの抵抗運動としての学問研究をしたたかに組織し、発表し続けた。同研究所の特色は、マルクス主義社会科学とフロイトの精神分析との方法的結合を探求した点にあるといわれ、社会についての理論を、経済、心理、歴史、哲学などの領域を超えて考察する研究者たちを擁していた。同研究所は一九三二年より紀要『社会学研究誌』を発行したが、ヒトラー政権成立後、一九三三年九月からは、パリのフェリックス・アルカン書店に発行元を移して、ドイツ語で刊行を続けた。ホルクハイマーは、パリの「エコール・ノルマル・シュペリユール」（高等師範学校）内に「亡命」したこの研究所について、次のように回想している。

ドイツ語は、第三帝国よりも、この研究所のささやかな範囲の中で、ずっとよく保管され、洗練されているというのが、われわれの確信であった。ドイツとフランスの戦争が始められたとき、機関誌のフランスでの続刊は、もう期待できないのではないか、という手紙を出版社宛てに送ったところ、私の受け取ったのは、フランスの文化大臣ジャン・ジロドーからの返事であり、そこには、出版を継続することを名誉と考えるという言葉が書かれていた。（久野収氏訳）[11]

パリ支所は、このように一九四〇年ナチスによるパリ占領まで存続し、「ドイツ精神とドイツ語の偉大な伝統、母国において今や生きる場所のなくなった伝統の火」（クラウス・マン）を、学問の領域で燃やし続けることに貢献したのである。[12]

ベンヤミンは、この研究所の所長ホルクハイマーや、所員テオドール＝W・アドルノと、二〇年代からすでに知り合っており、一九三四年からは、寄稿者という立場で、月五百フランの援助を受けることとなった。「フランスの作家の現在の社会的立場について」（一九三四発表）「言語社会学の諸問題」（一九三五）「複製技術の時代における芸術作品」（一九三六）「エードゥアルト・フックス――収集家と歴史家」（一九三七）といった、重要な論文の数々は、研究所の紀要に発表されたものである。一九三七年には月一〇〇〇フランに増額、同年秋には正式の共同研究者の待遇を受けて、ひと月あたり八〇ドルを支給されることとなった。ベンヤミン曰く「パリでの生活の最低の必要」は、このような形でかろうじて保証されたのであった。そして、ベンヤミンが、第三帝国からの亡命者として、困難な日常生活を強いられていたにもかかわらず、現代の私たちに残した重要な遺産――すなわち「パリのパッサージュ」論の膨大な未完の原稿は、このような時代に生まれたのである。この研究についての詳細は後に語ることとして、私たちは先回りして、彼の最期について、あらかじめ知っておかねばならない。

一九三九年三月、フランクフルト研究所は、ベンヤミンに対し、経済上の理由から補助金打ち切りの件を突然通告してきた。[13] 大戦の切迫を前に、別れた妻のドーラはロンドンへ、ブレヒト夫妻はスウェーデンにすでに移っていた。その双方からの脱出の誘いを、パリでの研究への未練から先送りにしていた彼は、研究所からの追い討ちで、避難の時を失ってしまう。ベンヤミン―ショーレムの往復書簡の最後の数通からは、激動の時代のなかで彼らのおかれた危機的状況が、ひしひしと伝わってくる。

〔ショーレムからベンヤミンへ〕（……）研究所からの破局的な通知とこちら〔＝イスラエルのエルサレム〕

の君を助けることができる人々の不幸が重なり合ったことは、何ともひどいことになったものだ――ここ数ヶ月の出来事に、ここ数日のチェコのユダヤ人を見舞った突然の破滅がさらに追い討ちをかけてきて、このショックで、当地ではほとんどすべての人が家族を何とかしようと、考えられないような行動に出ている。（……）僕にできることなら何としてでも君を援助したいのは当然なのだが、いざというとき、それをどのようにすればいいか、当てもなく思いあぐねている。政治情勢は緊迫していて、たとえ僕たちが望んだとしても、君にこちらへ来るための観光ビザを取るのもすっかり難しくなっている。（……）他方で、君がこれからもずっとパリにそんなに困らずに住むことが許されるとは、残念ながら誰一人信じる者はいないだろう。すべての見通しは不気味なものになってしまっていて、現実（明日の現実、明後日の現実）と折り合って行くなんていう幻想はとても抱くことができない。外から見ても、君が一体どこへ行けばいいのか、誰にも分からない。（……）

（一九三九年三月二十日付、山本訳）

［ベンヤミンよりショーレムへ］

親愛なるゲーアハルト、

この冷たい春にはパリの街頭に緑は乏しいが、それと同じように君の手紙にも希望の緑はほとんど織り込まれてはいなかった。それだけに君の手紙の行間からは冬景色がまざまざと浮んでくる。（……）

（一九三九年四月八日付[14]）

ショーレムからの次の書簡ではさらに、ヨーロッパ大陸におけるユダヤ人の殺戮にともなって、もはやパレスチナの地がテロの横行する危険地域になってきていることが、語られている。

一九三九年八月、独ソ不可侵条約が締結。九月、英・仏両国がドイツに対し宣戦布告。前論ですでに述べた通り、亡命ドイツ人たちのあずかり知らぬところで締結された独ソ不可侵条約によって、共産党系の反ナチス亡命者たちは、不当にも次々と逮捕された。フランス当局の一連の措置は、ついに高齢者を除く全てのドイツ亡命者

を対象とし、ドイツ人一万三千人、オーストリア人五千人と推定される一般の亡命者たちが、最低二週間から最高二ヶ月におよぶ強制収容所行きを命ぜられたのである。野村修氏はベンヤミンについての優れた評伝中「追悼のための」補章において、三九年九月パリ郊外コロンブ競輪場に収容された彼らの状況を、ベンヤミンの知人の手記から再構成している。

「コロンブ競輪場の石のベンチ――これが十昼夜のあいだ、ぼくたちの住所となった――のひとつで、ぼくはベンヤミンに出会った。ベンチに敷かれたわらはとっくに腐っていて、パテ・ド・ジョワ――安もののレバー・ペーストで、これをパンにぬったものが、ぼくたちの唯一の食物だった――で汚れていた。洗おうにもほとんど水がなかったので、そのわらは顔や髪に貼りつき、毛穴という毛穴にはいりこんでいた。」

（ハンス・ザール、野村引用訳）

「この二万人のヒトラーの勇敢な敵手たちのために、フランス当局は、平時の競輪の観衆用にそなえられていた便所をわざわざ閉鎖して、その代わりに大きなぶどう酒樽の空樽を一二個、競輪場の一方の側に立て並べた。そのうちの六個では、二万人分のブラック・コーヒーが沸かされた。残りの六個の空樽が、二万人の用便にあてられた。六時間もするとそれらは溢れだし、つぎの六時間には、大小便の池を渡らぬことには、溢れかえった樽のところまで行き着けなくなった。けれども、将来のパリの競輪の観衆を待つ便所は、ついに開かれなかった。夜、陰鬱な秋の雨が降ると、濡れた石と汚れたわらの上で、二万人はおがくずのようにくっつきあって横になった。眼下の芝生では機動隊員が、装塡した銃と懐中電灯とをもって歩きまわっていた。」

（ヘルマン・ケステン[13]）

十日目の早朝、人々はいくつかのグループに分けられ、地方の収容所へ分散させられた。ベンヤミンは、フランス中部、ニエーブル県ヌヴェールへと送られることになる。行きついた先は崩れた城館で、その状況が、コロ

ンブ同様、劣悪であったことは言うまでもない。しかしベンヤミンは、医師の診断で、ようやく肉体労働だけは免除されて、螺旋階段の下を仕切った場所のわらの寝床の上で「天使に守られた洞窟の聖者のように」住んでいたことが、回想されている。数週間後の十一月中旬、ベンヤミンを含む若干名は、アドリエンヌ・モニエ、シルヴィア・ビーチ、ヘルマン・ケステンなどの知人たちの献身的な努力によって、収容所から解放されて、パリに戻った。

しかし本当の困難は、その後にベンヤミンを襲ってきた。彼の最期については、すでに数多くの人々によって書かれてきたので、ここでは簡略に記すにとどめる。

一九四〇年六月十四日、ナチス・ドイツによって、ついにパリは占領される。彼はおそらく五月末か六月初め頃に自由地区ルールドへ逃れ、そこに二ヶ月ほど滞在している。ベンヤミンは、最後の方策として、アメリカへ渡るための入国ヴィサの交付を受けるために、八月マルセイユに入った。しかしその一方で、たとえアメリカに逃れたとしても「最後のヨーロッパ人」を自認する自分に、果して活路は見い出せるのかという疑問から、マルセイユにおいて彼は周囲の人々に、幾度か自殺の意図をもらしていたという。彼はここで、首尾よくアメリカへの入国ヴィザは手に入れたものの、今度はフランスからの出国ヴィザが交付されなかった。フランス政府が、ナチスから亡命ドイツ人の出国を認めぬよう指示されていた上に、彼が兵役義務年齢内にあったからである。またマルセイユからの乗船券はほとんど手に入らなかった。そこで当時避難民たちが最後にとった手段は、ピレネー山脈から非合法にスペインに入り、さらにポルトガルに出てリスボンから乗船するという方法であった。実際ハインリッヒ・マンは九月一五日に、この方法で脱出に成功し、アメリカへ再亡命している。

一九四〇年九月二六日、ベンヤミンは六人の亡命者とともにピレネー山脈を超えてスペインへ脱出した。険しい山道を十二時間も歩いた後、国境の港町ポル・ボウに辿りついた彼らは、結局スペイン警察に拘留されてしまう。フランスに送還すると脅迫されたその夜、ベンヤミンは、かねてから携行していたモルヒネを大量に飲んで自殺を図った。翌朝彼はまだ生きていたが、胃を洗篠されることに激しく抵抗して、あくまでも死を選んだ、と

伝えられている。

ベルトルト・ブレヒト

亡命者　W・B・の自殺によせて

ぼくは聞く、きみはみずからに手をくだした
殺戮者の先手をとって。
追放されて八年、敵の繁栄を見たすえに
越えがたい国境のほとりへ追われ
聞けばきみは、越えうるほうの境を越えた。

国ぐには倒れる。強盗の首領どもが
政治家よろしく羽ぶりをきかす。民衆は
軍服のかげにかくれて眼につかぬ。

このように未来は暗く、善の力量は
弱い。これらすべてをきみは見た
きみが苦しみうる肉体を破壊したときに。

（野村訳）[16]

2　『パサージュ論』の歴史哲学

以上私が、一九三三年から自死に至るまでのヴァルター・ベンヤミンの生涯を、ことさら詳細に追ったのは、他でもない、ベンヤミンをパリにおける一人の亡命者として捉え直し、その上で彼の十九世紀パリ研究を位置づ

けたいと願ったからである。

ブレヒトの詩に寄せて、彼は、非合法活動家や亡命者が次第に自分の家を失い、「アトをくらまして」いく過程を語っていたのを、ここで思い出したい。彼はそれを「大都市における貧困化」の過程とも言い直していた。必要最低限の生活の中で、パリ研究を続け、敵国人種として強制収容され、ついにピレネーの山中で死を選んだ一人の亡命知識人の軌跡を辿る時、私の中に、冒頭に掲げたブレヒトの詩がよみがえる。可能性を奪われ、次第に狭まっていく世界の中で、アトを残さず姿をくらましてしまったベンヤミン。その彼が、なぜ〈パリ〉に在ることに固執したのだろうか。ベンヤミンは、ショーレムに宛てた最後の手紙の中で、「今日、僕たちが論文を刊行してもらえるとすれば、その一行一行は――それを委ねる未来がどんなに不確かなものであろうと――闇の力に抗して勝ち取った勝利なのだ」[17]と、なお語っている。

一九三〇年代、第三帝国からの亡命作家や亡命知識人たちの多くは、祖国から切り離され、しかも亡命先での言論の場をも奪われて、書くべき言葉を失った。しかも彼らにとってより悲劇的であったことは、故国との断絶と長期にわたる亡命生活によって、書くべき主題と読者そのものを喪失していった点にある。

それに対し、ヴァルター・ベンヤミンは、亡命地パリにおいて、書き遺すべきことがあった。しかもそれは〈現代〉ではなく、〈前世紀〉に遡及する中から、見い出されていったのである。そしてその主題とは、パリという〈都市〉そのものなのであった。

*

一九三九年末、ヌヴェールの収容所から釈放され、パリに戻ったベンヤミンは、収容所での「絶えざる喧騒、わずか一時間であれ他人と別れていることができぬ状態」[18]で、すっかり神経が参り、歩き続けることもできない状態を書簡に書き遺している。それにもかかわらず彼は、国立図書館（Bibliothèque Nationale, B・N（ベー・エヌ）と略称）

が年末に再開されたことを喜び、新年になると、早速、入館許可証の再申請を申し出ている。ナチスによるパリ侵攻が目の前にまで迫り、友人たちは一致して、社会学研究所のあるアメリカへ発つことを勧めていたにもかかわらず、彼は自分が「どれほどフランスに結びつけられているか」を語り、「ぼくにとってこの世で［パリの］国立図書館に代りうるものはない」[19]と、なお断言するのであった。こうした過程を後世から見れば、ベンヤミンは、パリに、ことにパリの国立図書館にこだわり続けた結果、「逃げ遅れた」と言うこともできる。七百年近い歴史と、刊本だけでも現在一千万冊を超える蔵書を誇るこの図書館が、彼の仕事にとって重大な意味をもっていたことは、ベンヤミンの畢生の大作『パサージュ論』（詳細は後述）の次の断片が、鮮やかに示している。

パリのパサージュを扱ったこの著作は、葉叢（はむら）の上に円天井を形造っている、雲ひとつない蒼空の下の戸外で始められた。けれどもその蒼空は、何百万枚ものページによって、何百年もの埃に一面覆われてしまっていた。それらのページには、勤勉な仕事のさわやかな微風がそよぐこともあれば、研究者の重い溜め息がもれ、若々しい情熱の嵐が吹き荒れ、好奇心のものうげなそよ風がたゆたうこともあった。というのも、パリの国立図書館閲覧室の上にかかるアーケードに描かれた夏空は、閲覧室の上に光のない、夢見心地の円蓋を広げていたからである。［N1，5］（引用者訳）[20]

ぎっしりと書物で埋めつくされ、あたかも本で形造られているかのごとく見える壁の上に、遠い記憶のようなうっそうとした森と、夏空を描いた壁画が連なっている。そしてさらにそのはるか上方に、くもりガラスの円天井が広がっている。ページを繰る音、ペンを走らせる音、かすかな咳払いや、話声を、すべて吸収する不可思議な沈黙の世界には、同時に、思索する者たちの熱気や、好奇心の、得も言われぬ空気が、いきいきと流れている――それは現在でさえこの図書館を訪れた者の誰もが耽る至福の時間なのである。[21]ベンヤミンは、別の断片でこう言う。

そしてその後、国立図書館の私の席の前に広がるガラス張りの広間。それは前人未到の呪縛圏であり、私が魔術をかけるごとくして呼び出した人物たちが踏みしめる処女地である。［N1，7］（Ⅳ—P. 7）[22]

ベンヤミンがここで呼び出してくるのは、十九世紀パリを解明するための膨大な資料群である。十九世紀パリの都市計画史料、行政資料、回想記、文学作品、新聞雑誌記事、地誌、歴史書、哲学書から、版画、俗謡に至るまで、ベンヤミンが通読し、自らの手で複写した文献は、驚くべき数を数える。[23] 彼は次のようにも書いている。

およそ人類の歴史のなかで、パリという都市の歴史についてほど多くのことが知られているのも稀であろう。何千巻、何万巻という著書が、ひたすら地上のこのちっぽけな町の探求のためだけに捧げられてきた。すでに一六世紀には、かつてのLutetia Parisorum［パリのラテン名］の古代遺産をめぐるれっきとしたガイドブックが登場している。ナポレオン三世治下に印刷された帝国図書館の目録には、パリという見出し語をもつものがほぼ一〇〇ページにもわたっており、しかもここの蔵書にしてもとても完全だといえない。目抜き通りの多くのものにはそれだけを扱った特別な文献があるし、いかにも目立たない何千という家々についてさえ記録文書が残されている。ホフマンスタールは〈この都市を〉みごとにも一言で「ただひたすら生活だけから構成されているような一つの風景」と呼んだものである［……］［C1，6］（I—P. 160）

ヴァルター・ベンヤミンの未完の大作『パサージュ論』は、A～Zおよびa～rという記号と標題（例えばAは「パサージュ、流行品店、流行品店店員」という標題をもつ）のもとに、ベンヤミン自身によってあらゆるジャンルから抜き取られ、分類・収集された十九世紀パリについての膨大な覚え書および引用資料の集成である。明確な時期は不明であるが、主に亡命後一九三五年から死の直前まで執筆されたものと考えられている。その原稿はナチスによる没収あるいは紛失をおそれて、パリ脱出直前にフランス人作家ジョルジュ・バタイユに託され、

パリ国立図書館の司書であったバタイユは、それを館内に隠匿した。著者同様数奇な運命を辿った『パサージュ論』は第二次大戦後、再び友人たちの元に戻って、一九八二年にようやくドイツで全巻公刊されたのである。[24]

この特異な研究を、〈都市論〉という観点から改めて考えるなら、多木浩二氏がまさしく指摘するように、「〈都市〉という概念は、ベンヤミンとともに、まったく新しい問題の様相を捉える領域としてあらわれてきた」[25]と言えるだろう。一九三〇年代の亡命者として、パリに八年もの歳月身を置いたベンヤミンは、それにもかかわらず、驚くほど同時代のこの都市の様相を語っていない。街の中に実際に入りこみ、放浪し、その目や耳でつかみとってきた都市の実相を作品に形象化するという過程を辿らないのである。そうではなくて、「アトをくらます」かたちで、次第に追いつめられていく危機の時代のただなかにあって、ベンヤミンは、パリ国立図書館を自らの陣地とし、まさしく万巻の書物からの引用だけからなる一冊の来たるべき書物を夢想していた。「〈都市〉なる対象は、すでにベンヤミンにおいて実体ではなくて、言説のレヴェルで、多種多様な言説を収集し、熟練した将棋差しのように読みときつつ、都市をテクスト＝対象として構成した」（多木、八頁）のである。

しかもその〈言説としての都市〉の中で、彼は、ボードレールの生きた十九世紀パリという過去の都市を再構築しようとしたのではない。

ベンヤミンは、『パサージュ論』の方法叙説ともいうべき覚え書を、『パサージュ論』自体の中の「N：認識論に関して、進歩の理論」という項と、さらに一九四〇年の絶筆「歴史哲学テーゼ」のなかで書き遺しているが、彼はこの中で大変独自で興味深い歴史哲学を展開している。

> 過去を歴史的に関連づけることは、それを「もともとあったとおりに」認識することではない。危機の瞬間にひらめくような回想を捉えることである。歴史的唯物論の問題は、危機の瞬間に思いがけず歴史の主体のまえにあらわれてくる過去のイメージを、捉えることである。
>
> （テーゼⅥ、野村訳[26]）

ベンヤミンは、「均質で空虚な時間」をとおって、歴史が進行するという概念、つまり進歩の理論を否定する。惰性的な思考によって書かれる一般史が、往々にして「大量の事実を召集」（テーゼXVII）し、支配者側の、「勝利品」の記帳をするにとどまるのに対し、ベンヤミンが考える歴史的時間は、つねに〈いま〉によって満たされている。

歴史という構造物の場を形成するのは、均質で空虚な時間ではなくて、「いま」（Jetztzeit）によってみたされた時間である。だからロベスピエールにとっては、古代ローマは、いまをはらんでいる過去であって、それをかれは、歴史の連続から叩きだしてみせたのだ。フランス革命はローマの自覚的な回帰だった。それは古代ローマを引用（Zeiteren）した――ちょうど流行が過去の衣裳を引用するように。（テーゼXIV、野村訳[27]）

彼によれば、危機の瞬間の〈いま〉に、過去を回想する主体は、「戦闘的な被抑圧階級」である。ロベスピエールが、古代ローマという過去に「革命的なチャンスの合図」を認識したように、ベンヤミン自身が一九三〇年代という現在にあって、その「非常事態」を再考し、反ファシズム闘争を強化するための新たな歴史概念をつくり出そうとしていた（テーゼVIII）ことは確かであろう[28]。しかしベンヤミンは『パサージュ論』の中で、回想の契機となる特定の時代を十九世紀に定めることによって、「今では失われたもろもろの形式から今日の生活を、今日の形式」［N 1, 11］自体を、読み取ってみようと試みる。

――「進歩」という概念を克服することおよび「衰亡の時代」という概念を克服することは同じ事柄の両面にすぎない。［N 2, 5］（IV―P. 13）

――この仕事を支えているパトス、それは衰亡の時代などないという考えだ。ちょうど私が悲劇論（『ドイツ悲劇の根源』）で一七世紀を見ようと努めたように、一九世紀を徹底してポジティヴに見る試みである。［N 1,

6］（Ⅳ—P. 6—7）

『パサージュ論』で分析されているのは、「集団の夢」としての「十九世紀」である。モード、建築、パサージュなどの資本主義時代の形象の中に、無意識のうちにこめられている「集団の夢」を明らかにすること、それがこの書物の目的であった。そこでは、〈進歩〉という概念を捨て、その時代におけるむしろ「空しい、遅れた、死滅した部分」［N 1a, 3］に光が当てられる。

都市に生じる新しい現象は、いかがわしくもあれば通俗的でもある魅力にとんでいる。興味深いのは、通俗性にもかかわらず、こうした新しい現象こそ、根源としての歴史に行き着く方法であると考えたことである。当世風で通俗的なボロや屑の堆積を夢の残滓と見做すのはどういうことだろうか。ベンヤミンは発生期にはどうでもいいボロや屑のように見える可視的現象に、歴史的な認識のなかで「正当な位置をあたえたい」と思ったのである。このことはなにを意味するのか。あたらしい現象との目に見える接触を、眠っている間に見る夢の可視性に重ね、夢から目覚めてそれを解読する作業を歴史的覚醒（という認識行為）として捉えることである。

（多木浩二[29]）

ベンヤミンの歴史哲学の独自性は、〈現在〉を歴史的覚醒の時と、とらえた点にもある。

プルーストがその生涯の物語を目覚めのシーンから始めたのと同様に、あらゆる歴史記述は目覚めによって始められねばならない。歴史記述は本来、この目覚め以外のものを扱ってはならないのだ。こうしてこのパサージュ論は十九世紀からの目覚めを扱うのである。［N 4, 3］（Ⅳ—P. 23）

ベンヤミンの中に〈パリの遊歩術（パサージュ）――弁証法的夢幻劇〉というテーマが生れてきたのは、亡命以前の一九二八年であるという。そもそもパサージュとは、パリにおいて一八二二年以降の十五年間に作られた屋根付商店街のことである。ベンヤミンは、『パサージュ論』の膨大な引用群のトップを、次のような断片からスタートさせている。

「（……）産業による贅沢の生んだ新しい発明であるこれらのパサージュは、いくつもの建物をぬってできている通路であり、ガラス屋根に覆われ、壁には大理石が貼られている。建物の所有者たちが、このような大冒険をやってみようと協同したのだ。光を天井から受けているこうした通路の両側には、華麗な店がいくつも並んでおり、このようなパサージュは一つの都市、いやそれどころか縮図化された一つの世界とさえなっている（……）」［『絵入りパリ案内』一八五二年］

これは、パサージュを描いた古典的な名文である。この文章から出発して遊歩者や天候についてのさまざまな思いが解きほぐされてくるが、それだけではない。パサージュの建築のあり方についての経済的および建築上の観点から言えるさまざまなことにとってもうってつけの箇所となろう。［A 1，1］（I―P. 63）

ベンヤミンは、〈パサージュ〉を象徴的な例とするような、歴史の中にある具体的な現象と、それが指し示す観念や想像力との、弁証法的な交錯を、〈目覚め〉のうちに認識し、その作業を十九世紀パリという〈都市〉現象全般にわたって試みようとした。彼自身も認めるように、〈パサージュ〉に啓示を受けたその原点には、一九二六年、フランスのシュルレアリスト作家ルイ・アラゴンが発表した小説『パリの農夫』がある。

出発点にはアラゴンがある――『パリのいなか者』が。これをぼくは毎晩、ベットのなかで読んだが、二ページか三ページ以上はどうしても読めなかった。動悸がたかぶってきて、本をおかぬわけにゆかなかったのだ。

ぼくとこういう読書とのあいだに幾年もの歳月をもちこむ必要があることを伝えるなんという警告、なんという指示！　それでも、路地論への最初のメモは、あのころに書かれている。

（T・W・アドルノ宛、一九三五年五月三一日付、野村訳[30]）

アラゴンは、一九二〇年代となってはもはや時代遅れとなってしまったパサージュの一つ、「オペラ座横丁（le passage de l'Opéra）」に入りこみ、一軒の安ホテルの描写から始まって、カフェ・グリヨン、杖の店、理容店、公衆浴場と、散歩者の観察、夢想、幻想、言葉遊び、形而上的思考が果てしなく繰り出される、不可思議なテクストを織り上げている。アラゴンは言う。

想像力のあらゆる動物、あらゆる海草は、まるで影の髪の毛のようにして、光のとどかない人間の活動地帯に、姿を消したり、永久に根づいたりする。（……）生きているひとたちの最もさだかでない活動がつづけられている場所で、生命のないものが時として彼らのもっともひそやかな原動力を反映している。このように、ぼくたちの都には見忘れられたスフィンクスが住んでいる。彼らは、夢心地の通行者が瞑想をうっかり彼らのほうへ向けないかぎり、通行者の足を引き止めはしないし、命にかかわるような謎の問いを投げかけてもこない。けれども彼がもしスフィンクスを見破ることを心得ていて、賢者らしく問いたずねるとしたら、姿の見えぬこの怪物たちのおかげで、彼がふたたび探究しはじめるのは、またもや彼自身の深淵なのである。異常なものからの現代的な光線、これが今後彼を引き止めるものとなる。

（佐藤朔氏訳、傍点引用者[31]）

しかしこれほど魅了されたアラゴンの仕事に対し、ベンヤミンは自分の十九世紀論との相違をあらかじめはっきりと認識して、次のような断片を書き遺している。

私のこの仕事の基調となっている傾向をアラゴンのそれと区別するのは次の点である。アラゴンが夢の領域に留まろうとするのに対して、私の仕事では覚醒がいかなる状況であるのかが見出されねばならない。アラゴンの場合には、印象主義的な要素――それは［アラゴンによって］「神話」と言われるが――が残されている。彼の著作には、明確な形姿を持たない哲学的思考要素がさまざまあるが、それはこの印象主義によるものである。これに対し私の仕事では、「神話」を歴史空間のなかに解体しきることが問題なのである。それは、過去についての未だ意識化されていない知を呼び覚ますことによってのみ可能となる。［N 1, 9］（Ⅳ―P. 7―8）

――過去についての未だ意識化されていない知を呼び覚ますこと、それは、「夢から目覚めて」歴史の根源を解読する作業に他ならない。ベンヤミンは、惰性的な十九世紀史を書こうとしたのでは全くなく、そうした歴史の連続性を打破し、現在が、特定の過去の一時代と「回想」によって出会うという局面をもつことを意図したのである。彼はそれを

過去に現在が衝突して、過去へと喰い込むこと。［N 7a, 3］（Ⅳ―P. 36）

というそれこそ目の覚めるような一行で表現してもいる。あるいは次のような表現はどうだろう。

どのような歴史的な認識も、ちょうど釣り合いがとれて止まっている秤のイメージで捉えることができる。その秤の一方の皿には、かつてあったことが、そしてもう一方の皿には、現在の認識が載っている。前者の皿には見栄えのしない、いくら集めても数が十分にはならないような事実が載っているとすれば、後者の皿には、ほんの僅かだがずっしり重くて量感のある分銅が載っているだけでよい。［N 6, 5］（Ⅳ―P. 31）

ここで救出されるのは、はたして過去だけだろうか——そうではなくて、この時「過去は、現在への〈根源〉としての渦を巻くのであって、そこに現在は解放をかいまみることになる」（野村[32]）のである。ベンヤミンの都市論が、単なる「十九世紀パリ論」にとどまらず、驚くべきアクチュアリティを獲得している秘密はこの歴史哲学にこそある。そして一九三〇年代パリ神話を探ろうとしている私たちの前に、ベンヤミンが提示する「パリ論」が、十九世紀ではなく、今世紀そのものを映し出す鏡でもあることを、次に考えていかねばならない。

3　遊歩と街路の詩学

ベンヤミンは自分の生きた一九三〇年代のパリをいかに観察していたのであろうか。それを知る資料は、私たちにはほとんど残されていない。実際安ホテルを転々とし、生活に必要な最小限の収入のみが何とか保障された耐乏生活の中で、どうやって亡命先の都市生活を楽しもうというのだろうか。彼は、一九三四年一月、他の亡命者たちと喫茶店で会うことすら避けている、と語った（先に紹介した）同じショーレム宛書簡の中で、

> 僕はブレヒトとは極めて親しいとはいえ、あちら［スウェーデン］に行けば、もっぱら彼だけを頼りきることになるわけで、それがどうしてもはばかられるのだ。それに完全に無一文でも、大都市が与えてくれるあの無名性を求めるのは悪くない。
>
> （一九三四年一月一八日付、山本訳[33]）

とも書いている。「大都市が与えてくれるあの無名性」とは、孤独であることの一種の気安さとも、あるいはより深刻に「アトをくらます」ことができる状況とも、解釈することができる。多くの亡命者たちがパリを離れようとしていた時代に、迫害を予感しながらも、ことさらこの都市にとどまり、この都市を書こうとしたベンヤミンという外国人の仕事に改めて注目して良い。危機の時代であったからこそ、国立図書館の膨大な資料群から、

つまり〈言説〉のみから十九世紀パリを〈モンタージュ〉しようとした彼は、しかし過去を救済すると同時に、現在をも射る矢を得ている。そして私の知る限り、他のいかなる都市でもなく、「なぜパリでなければならないのか」という問題について、外国人ならではの視点で——あるいはベルリンに生れ、モスクワ、マルセイユ、ナポリ……とヨーロッパの諸都市を経巡り、観察してきた者ならではの視点で、はっきり相対化したのは、やはりベンヤミンが初めてではなかったろうか。

ベンヤミン『パサージュ論』の中心概念として、すでに幾度も論じられている「遊歩」と、「街路」の思想は、単に十九世紀の問題ではない。それは、パリという都市を繊細な感受性と詩的な直観によってとらえた一九三〇年代の外国人芸術家たちが、(偶然とはもはや言えぬほど)共通に追求したテーマでもあった。大不況の時代にあって、「招かれざる客」であった彼らは、貧困に苦しみながらも街を放浪し、ルポルタージュにも似た「生の体験」の中でパリ独自の〈生〉の形態を読み取って、それを作品の上に定着させていった。一方ベンヤミンは、前世紀都市についての〈言説〉を経由することによって、そこに驚くべきほどシャープに近づいているのである。お互いに相知ることもなかった彼ら一人一人の仕事については順次論じていくこととして、ここでは最初に、ベンヤミンの都市論と思想に触れておかねばならないだろう。

一九二六年三月から数ヶ月間、二度目のパリ滞在の折、ベンヤミンは女友達ユーラ・ラートに宛てて、次のような手紙を送っている。

……加えて遊歩というものは、しばらく読書の習慣を忘れさせるところがあるよ。とにかくぼくにはそんなふうに思える。(……)けれども歳の市にまさるものは何もない。この都市にはあらゆる芸術があり、あらゆる活動があるが、その最上の美点は、この都市が根源的なもの・自然なもののなごりを保ち、わずかなそれの輝きを褪せさせずにいることだ。

(一九二六年四月八日付、野村訳[24])

この七年後、今度は亡命者としてこの街に再び来ることになろうとは、彼自身もちろん予想だにできなかった二十年代の書簡を読むと、ベンヤミンのパリにおける原体験が、いかに幸福なものであったかがわかる。この時彼は、友人フランツ・ヘッセルとの共同作業でプルーストの翻訳を完成させるためにパリに滞在していたのであった。そのヘッセルの著作『ベルリンの散歩』（一九二九）に、ベンヤミンが寄せた書評「遊民の回帰」（一九二九）には、のちの『パサージュ論』に発展するベンヤミン自身の〈遊歩〉論の原型が、すでに鮮やかな言葉によって記されている。

かりに、今あるかぎりの都市を叙述した本の全部を、著者の出生地に従って二つのグループに分けてみようとすれば、当の都市生れの著者によるものはひじょうに少数であることが、必ずや判明するにちがいない。表面的に著作のきっかけとなったもの、例えば、エキゾチックな、ピトレスクなものは、他所生れの人にたいしてしか影響はない。その土地生れの人間として都市の肖像を描こうとするには、それとは別の、より深い動機が必要なのだ。つまり、遠くへ行きたいというのではなく、過去へ旅しようとする者の動機である。その土地生れの著者による都市の本には、いつも回想録に通じるものがあるはずであって、その書き手が現場で幼年時代を過ごしたことには、ふかい理由がある。[35]

ヘッセルが「ベルリンの農夫」として、この街に頌歌を捧げたように、ベンヤミン自身にも『一九〇〇年前後のベルリンにおける幼年時代』（一九三二―三八）『ベルリン年代記』（執筆年不明、一九七〇年公刊）という素晴しい回想録がある。街の中をさまよう（flâner）のは、単なるぶらぶら歩きではない。それは街の細部やなにげない風景の発見であり、土地の歴史や神話を「覚醒」のうちに呼び起すことである。「遊歩」（la flânerie）という、現代都市論で頻用される重要なキー・ワードを生み出したのは、ほかでもないベンヤミンその人なのである。彼は、ベルリン市民に感じとって欲しいと願う――「高架の鉄橋のうえの空が［スイスの］エンガディンの

連峰の空のように青く澄みわたるのを、絶えまない騒音のなかから、打ち寄せる波と波のあいまにあるような静寂がふいに生まれるのを、そして都心の細い裏通りが、山あいの小さな沢のように、一日の時の移ろいをあざやかに映し出してくれるのを。[36]」（「遊民の回帰」）ベンヤミンは『パサージュ論』の中でマルセル・プルーストが「突然一つの屋根、石ころに反射する太陽の光、道路の匂いに」遊歩の足をとめ、それらが隠している秘密に思いを至すという場面を引用［M 2a, 1］しながら、そこに古いロマン主義的な風景感情が解体し、風景（Landschaft）が、都市風景（Stadtschaft）に移行するさまを読み取っている。都市こそを「遊歩にとっての聖なる土地」とみなすことが、ボードレール、プルーストやアラゴンからベンヤミンが受け取った重要な遺産なのであるが、しかもその「遊歩」を可能にしたのは、他ならぬパリであると、彼が繰り返し論じているのが、興味深い。

遊歩者というタイプを作ったのはパリである。それがローマでなかったというのは奇妙なことである。それはどうしてであろうか。ローマでは、夢さえもおきまりの道を行くのではなかろうか。そしてこのローマは、神殿、建物に囲まれた広場、国民的聖所があまりに多いので、一つ一つの舗石や店の看板ごとに、階段の一段ごとに、そして建物の大きな門をくぐるたびごとに、歩く人の夢の中にこの町はそっくり入り込みにくいのではなかろうか。また多くの点ではイタリア人の国民性によるのかもしれない。というのもパリを遊歩者の約束の地にしたのは、あるいはホーフマンスタールがかつて名づけたように「まったくの生活だけからつくられた風景」にしたのは、よそ者ではなく、彼ら自身、つまりパリの人々なのだからである。風景［Landschaft］――実際パリは遊歩者にとって風景となるのだ。あるいはもっと正確に言えば、遊歩者にとってこの町はその弁証法的両極へと分解していくのだ。遊歩者にとってパリは風景として開かれてくるのだが、また彼を部屋として包み込むのだ。［M 1, 4］（III―P. 70―71）[37]

「遊歩」を可能にするのは、パリという都市のみならず、パリ人たちであるという指摘がおもしろい。『パサー

ジュ論』の［M：遊歩者］の項には、これを裏付けるために十九世紀ロンドンについてのエンゲルスからの引用がある。

（……）数日間、大通りの舗装の上を歩き回ってみると……ここロンドンの人たちが、文明のあらゆる驚異を実現するために彼らの人間性の最上の部分を犠牲にしなければならなかったことに初めて気づく。……路上の雑踏からしてすでに、何か不快な、人間の本性と相入れないものがある。そこに押し合い行き交う何十万ものあらゆる階級の人々、あらゆる身分の人々は、みんな同じ性質、同じ能力をもち、幸せになることにひとしく同じ関心をもった人間ではないだろうか。（……）それなのに彼らは、なに一つ共通するものはないかのごとく、互いになに一つ関係するものはないかのごとく、互いの側を通り抜けて行く。そして彼らの間で唯一の合意は、それぞれが歩道の右側を通り、足早にすれ違っていく二つの群衆の流れをとどこおらせないようにするという暗黙の了解だけなのである。（……）（フリードリヒ・エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』第二版、一八四八年）［M5a, 1］（Ⅲ—P.93）

ベンヤミンはさらに、自分と同時代の作家ポール・ヴァレリーの一節を引用して、ロンドンの孤立した群衆のあり方が、現代まで変わらないことを確認する。ヴァレリーは、ロンドン橋の上から、水と光の心地良いゆらめきを見ている自分が、なぜその豊かさを味わいつくせないのかに、突然気づいてこう書いている。

（……）ところが私は、目に見えない盲目の人々の一群が、自分たちの生活の差し迫った目標に引きずられて、歩きまわり、通って行くのを背後に感じるのだった。その群衆は、各人がその経歴、その独自の神、その長所や短所、独り言や運命を持った特異な人々の集まりだとは私にはまったく思えず、自分の体の陰で見えないままに、私はその人たちを、そうとは意識せずに、何か分からない空隙に一様に吸い込まれていく、どれも

同じ粒の流れだと思った。その鈍く慌ただしい流れが単調に橋を通過していくのが私に聞こえるのだった。自尊心と不安とが混じった孤独を私はこれほど感じたことはない。（ポール・ヴァレリー『言わざりしこと』一九三〇年）［M20, 2］（Ⅲ—P. 147—148）

互いに全く関心を示さず、無気味な「同じ粒の流れ」にも似た群衆——そうした人々がつくる街に「遊歩」という身振りはあり得ない。それに対しパリでは、プルーストが観察するように、群衆は「互いに、同じように見たところ目もくれない風を装いながら、秘かに同じように関心を寄せ合っている」（［M21, 1］）。

こうした「群衆に対する愛と怖れ」（プルースト）を、誰よりも早く、鋭く表現したのがボードレールであったこと、そしてそこから啓示を受けているのがベンヤミンであることは、言うまでもない。ベンヤミン自身の引用によって、今やあまりにも有名になったボードレールの一節を挙げておきたい。

完璧な遊歩者にとって……数の中に、波打つものの中に……居を構えることは、無限の喜びである。……わが家の外にいながらどこでも我が家にいる気持ちになること、世界を見つつ、世界の中心にいながら世界に対して身を隠していること、それが、そうした独立心が強く、情熱的で、公平な［〃］精神の持ち主たちのごくささやかな楽しみのうちのいくつかであるが、それは言葉では不器用にしか言い表わせない。観察者とは、いたるところでお忍びを楽しむ王侯である。……普遍的な生を愛するものは、巨大な電気貯蔵器の中に入っていくように群衆の中に入っていく。その人を、そうした群衆と同じだけ巨大な鏡になぞらえることもできる。意識をそなえた万華鏡に、ひと動きごとに、多様な生が、生のすべての要素の流動する魅力が見える万華鏡になぞらえることができる。（ボードレール「現代生活の画家」一八六三年）［M14a, 1］（Ⅲ—P. 126）

パリが遊歩者にとって約束の地となりうる第二の条件は、遊歩者をとりまく視線のあり方に求められる。「遊

歩する」というフランス語の動詞flaner が、元来「うろつく」というネガティヴな意味をもつように、「遊歩の哲学」なき街では、その土地を散歩する暇人は、市民たちから「たちまち目障りな怪しげな人物」に思われる。ベンヤミンは先のヘッセルの書を通じてベルリンとパリとの相違をここにこそ求め、パリでは「ひとたび町を歩けば、そこには、ひんやりとした家屋の通路で、午後をじっと坐って縫物をして過ごす門番のおかみさんたちがいて、(……)まるで自分の乳母から見守られるように、かの女たちから見つめられているのを感じる」[38]のだと説いている。

『パサージュ論』の代表的項目[M:遊歩者]と[m:無為]は、パリでこそ成立する遊歩者の性格を、しかも様々に矛盾する性格を兼ね備えた男として、次々と引用のモンタージュの中に浮かび上がらせている。

——長い時間あてどもなく町をさまよう彼は、見知らぬ界限の魅力にとりつかれて徘徊し、空腹と疲労でへとへとになりながらも、「陶酔」の感覚に耽っていく。彼は瞑想と「無為」の時間にこそ、街を「研究」、観察できることを知っており、観光客や群衆のあてどないぶらぶら歩きとは違って、その「土地の守護霊(ゲニウス・ロキ)」を呼び起す。遊歩者は「ゲニウス・ロキの司祭」と、「探偵」の嗅覚を合わせもつ存在なのである。研究者、懐疑家、賭博師、娼婦を買う男、陶酔のなかの追想家、探偵、モヒカン族、収集家……と、ベンヤミンが挙げる性格は、遊歩者が、単なるロマンティックな夢想家とは異なることを、あます所なく示している。[39]

神は創世の仕事を果たしたのち、休息した。第七日目のこの神こそは、市民が無為の模範としたものである。遊歩において市民は神の遍在を手に入れ、賭けごとにおいて神の全能を、研究において神の全知をものにする。——この三位一体こそは、ボードレールのサタニズムの根源にあるものである。——無為に過ごす者が神に酷似していることは、「労働は市民の誉れ」という(旧プロテスタント的な)言葉がその効力を失い始めたことを示している。[m4, 6](III—P.360)

ボードレールの時代ではなく、一九三〇年代の外国人芸術家たちが、貧困の中でパリを放浪し、街の中でこそ自分の表現形式をつかみとっていった理由は、実はベンヤミンのこの「覚醒」のうちに読み取れるのではないだろうか。大不況であり、（亡命）外国人であるという二重の条件下で「労働過程一般とのいかなる関係をも」（［m3，1］）絶たれた外国人芸術家たちは、すでにもう「無為」の中にある。そして亡命であれ、放浪であれ、社会から疎外された者たちは、その代り異国の街に対して遊歩者（フラヌール）の視線をもちうる――それは何よりも彼らが「孤独」な存在であったということから説明されるだろう。

無為という条件の下では孤独は重要な意味をもつ。どんなに些細もしくは貧困な事件であっても、そこから潜在的に体験を解き放ちうるのは、孤独だからである。孤独は、感情移入を通じて、どんな偶然の通行人をも、事件の背景に役立てる。感情移入は孤独な人間にのみ可能である。それゆえ孤独は真の無為の条件なのである。［m4a，2］（Ⅲ―P.361）

こうした孤独な遊歩者が、都市風景の中に降り立つことによって、疲労困憊するほど歩き回りながらも、ついに陶酔の感覚にまで至ることができるのではなぜだろうか――それは次に「室内としての街路」（［M3，4］）という、ベンヤミンならではの光り輝くような定義によって明らかにされる。

街路は集団の住居である。集団は永遠に不安定で、永遠に揺れ動く存在であり、集団は家々の壁の間で、自宅の四方の壁に守られている個々人と同じほど多くのことを体験し、見聞し、認識し、考え出す。こうした集団にとっては、ぴかぴか輝く琺瑯引きの会社の看板が、ちょうどサロンでの市民にとっての油絵のように、いやそれ以上に壁飾りなのであり、「貼紙禁止」となっている壁が集団の書き物台であり、新聞スタンドが集団にとっての図書館であり、郵便ポストがその青銅の像であり、ベンチがその寝室の家具であり、カフェのテラ

スが家事を監督する出窓なのである。路上の労働者が上着をかけている格子垣があると、そこは玄関の間であり、いくつも続く中庭から屋外へ逃れ出る出入口であり、市民たちにはびっくりするほど長い廊下も、労働者たちには町中の部屋への入り口である。労働者たちから見れば、パサージュはサロンである。ほかのどんな場所にもまして、街路はパサージュにおいて、大衆にとって家具の整った住み馴れた室内であることが明らかになる。[M3a, 4]（Ⅲ—P.84）[40]

まさに、「パリは風景となってかれに開かれ、部屋となってかれを閉じ込める」。ベンヤミン自身、サン＝ジェルマン通りと、ラスパイユ通りの角の、立入禁止の工事区域が、またたく間にあらゆる種類の小売商人たちによって占拠され、彼らが街路を室内と変えて住みついてしまう様子を報告している（[M3, 1]）。しかも彼はそれを同じ光景を、一八五七年の記録から見つけ出してきているのだ。パリは「家」であり、街区（カルチエ）は一つ一つの「部屋」、ブティックは「戸棚」……と、『パサージュ論』には、はっとするような比喩が、次々と引用されている。

ベンヤミンはさらに、G・K・チェスタートンのディケンズ論を引いて、英語の隠語の言い回しに、締め出しをくって鍵のかかったドアの前にたっている人のことを、「彼は道路に出る鍵を持っている」と言う——と紹介している（[M11, 1]）。「彼の領分は、歩道だったし、街灯は彼の星、通行人は彼の主人公」（チェスタートン）というディケンズの世界はまた、一九三〇年代の芸術家たちの世界でもあることを、私たちは見ていくことになろう。ベンヤミンが別の項［P：パリの街路］で明言する通り、「街路（トロットワール）」は、「道（ヴェーク）」ではない。古い遊牧民たちが迷った「道」ではなく、「室内としての街路」の中で、「人間は迷うことの中で街路に身を任せるのではなく、単調な、しかし魅惑的に延びていくアスファルトの帯に屈状するのである」（[P2, 1]）。

一九三〇年代のパリを生き、十九世紀パリの膨大な言説を渉猟しながら目覚めのうちに「今日の形式」をとらえようとしたヴァルター・ベンヤミン。そしてまたナチズムや、ヴィシー政権という現実の政治にコミットする

ことなく、意志をもって「アト」をくらましてしまった一人の亡命思想家が、十九世紀パリに、いかに自分の時代を見たのか――最後に次の一節を引用して、いよいよベンヤミンの同時代人たちに光を当てていきたい。[41]

ボードレールにおける大衆。それは遊歩者の前にヴェールとなってかかっている。それは孤立している者の最新の麻酔薬である。――それは次に個人のすべての痕跡を消し去る。それは追放された者の最新の隠れ家である。それは、ついに、都市の迷宮の中で、最新で、もっとも究めがたい迷宮となる。大衆によって、これまで知られていなかった冥界の相貌が都市像の中に刻み込まれる。[M16, 3]（Ⅲ―P. 132）

〈註〉

（1）拙論「亡命地パリの意味――『パリ神話』研究」（筑波大学文芸・言語学系『文藝言語研究――文藝篇』第二八巻、一九九五年九月）を参照されたい。

（2）これらの芸術家たちの仕事については、現在連載中の拙論「パリ・一九三〇年代の光と影」（『アステイオン』TBSブリタニカ、第三九号～一九九六年一月～）を参照されたい。

（3）ヴァルター・ベンヤミン著、野村修訳「ブレヒトの詩への注釈」（『ヴァルター・ベンヤミン著作集』［以下著作集と略す］第九巻所収、一九七一年）一一二―一一四頁。以下本文中、同注釈末尾のページ数は、同書に拠る。

（4）ベンヤミンは、一九三〇年三月二〇日付ショーレム宛書簡（G・ショーレム編、山本尤訳『ベンヤミン―ショーレム往復書簡―一九三三～一九四〇―』法政大学出版局、一九九〇年、五五頁、以下往復書簡と略す）で、この一週間前に亡命を決意したとあるが、正確な亡命日付は不明である。なお以下ベンヤミンの伝記については、主に次を参照した。
野村修『ベンヤミンの生涯』（平凡社ライブラリー、一九九三年）
村上隆夫『ベンヤミン』（清水書院、一九九〇年）

（5）野村修訳、ベンヤミン書簡（パリ発信、ショーレム宛、一九三三年三月二〇日）、著作集第一五巻、六六頁。

（6）往復書簡、三八八頁中の、ショーレムによる註記（1）を参照。

（7）同書、一二八頁。（一九三三年一〇月一六日付）

（8）同書、一一三頁。（一九三三年九月一日付）
（9）同書、一四九頁。（パリ発信、一九三四年一月一八日付）
（10）アドリエンヌ・モニエ著、岩崎力訳『オデオン通り』（河出書房新社、一九七五年）一九四―一九五頁。
（11）久野収『ファシズムの中の一九三〇年代』（リブロポート、一九八六年）八一頁。
（12）一九三九年ドイツ軍パリ占領後、同研究所はアメリカ、ニューヨークのコロンビア大学に再度移転し、英文版『哲学・社会科学研究』を一九四二年まで続刊した。
（13）ショーレム宛ベンヤミン書簡（パリ発信、一九三九年三月一四日付）参照のこと。（往復書簡、三八六頁）
（14）同書、三八八―三九〇頁。
（15）野村、前掲書、二五〇―二五二頁。
（16）同書、二一三頁。
（17）ショーレム宛ベンヤミン書簡（一九四〇年一月一一日）往復書簡、四〇八頁。
（18）ホルクハイマー宛ベンヤミン書簡（パリ発信、一九三九年一一月三〇日付）著作集第一五巻、二七七頁。
（19）ホルクハイマー宛ベンヤミン書簡（パリ発信、一九三九年一二月一五日付）同書、二八三頁。
（20）Walter Benjamin, Das Passagen-Werk (Gesammelte Schriften V-1, 2) Suhrkamp Verlag, 1982, Band V-1, p. 571.
なお以下本文中の邦訳は
今村仁司他訳『パサージュ論』全五巻（岩波書店、一九九三年―一九九五年）［以下『パサージュ論』と略す］
を使用するが、本断片に限っては邦訳の意味が通りづらいため、フランス語訳
W. Benjamin Paris, capitale du XIXe siècle-Le livre des Passages (traduit par Jean Lacoste) Les éditions du Cerf, 1989, p. 474.
を参照にして拙訳した。
（21）B・Nの歴史については次が便利である。
Bruno Blasselle et Jacqueline Meiet Sanson, La Bibliothèque nationale—mémoire de l'avenir, 〈Découverte Gallimard〉, Gallimard, 1991.
なおミッテラン前大統領の〈大計画（グラン・プロジェ）〉の一環で、B・Nは一九九七年をめどに、セーヌ左岸トルビアック地区への新図書館に完全移転する。旧B・Nは美術系図書館として使用される予定であるが、いずれにせよベンヤミンや多くの研究者たちが愛したあのB・Nの至福の空間は、失われてしまうのかもしれない。

ベンヤミンの親しい友人でもあり、彼より三〇年ほど前パリに来た詩人リルケ（在パリ一九〇二―一九一四）は『マルテの手記』（一九一〇）の中で、B・Nについて次のような美しい一文を残している。

「ビブリオテク・ナシオナルにて。／僕はここにすわって一人の詩人を読んでいる。ホールには大勢の人々がいるが、ちっともそんな気配は感じられない。大勢の人間はみな書物の中にいるのだ。ときどき、書物のページの中で彼らは動く。眠っている人間が、二つの夢の間を寝返りするみたいだ。読書する人々の中にすわっているのは心が楽しい。（……）僕はここにすわって、一人の詩人を持っているのだ。（……）しかし、まことに運命は不思議なものだ。僕はここで書物をひろげている人間の中で、いちばん貧しい男に違いない。しかも外国から来た人間だ。その僕は一人の詩人［＝フランシス・ジャムのこと］を持っている！（……）

僕は道を歩く時、少しばかり人をはばかっているかもしれぬ。しかし僕は、やがて［B・Nの］あるガラス戸の前まで行くと、自分の家へ帰ったようにそれをあけて、次の入口で閲覧券を見せる。（……）そして僕は書物の間に安心して隠れるのだ。僕は彼ら［街頭の敗残者たち］から死んだのと同じくらい完全に逃げている。僕はここにすわって、一人の詩人を読むのだ」（大山定一訳、新潮文庫、一九七七年、四一―四五頁）

(22)　以下、本文中『パサージュ論』引用断片末尾の［　］内は、断片番号、また（　）内は、岩波版邦訳の巻数―頁数を示す。

(23)　ベンヤミンの書簡を読むと、彼はこれらの引用に際し、一部写真撮影による複写も行なっていたことがわかる。なおベンヤミンの複写という行為が、単なるコピーにとどまらず、「書物蒐集家が残した特殊な形態のブック・コレクション」を成していたのではないかとの、大変興味深い仮説が最近鹿島茂氏によって提示されている。（鹿島茂「コレクトする子供―弁証法的存在としての」〈連載『パサージュ論』マルジナリア2〉『ユリイカ』青土社、一九九五年二月）

(24)　『パサージュ論』と並行、あるいはそれから発展して、ベンヤミンの研究の重心は次第にボードレール論に移行していくが、その過程で生み出された諸論文の複雑な経緯については、野村修氏前掲書、および岩波版邦訳第一巻所収の解説（三島憲一「『パサージュ論』のテクスト成立過程の素描」、今村仁司「解説」）を参照のこと。

(25)　多木浩二「方法としての都市――『パリ――一九世紀の都市』から『パサージュ論』へ」（『思想』第八四〇号、岩波書店、一九九四年六月）一六頁。

(26)　ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」、著作集第一巻所収、一一六頁。

(27)　同書、一二四―一二五頁。

(28)　野村、前掲書、二四五頁の註（13）によれば、ベンヤミンは一九四〇年春、古い知人でやはり亡命者となっていた

作家ゾーマ・モルゲンシュテルンに「テーゼ」を朗読して聞かせ、これはスターリンとヒトラーとの条約にたいする返答なのだ、と語ったと言われている。

また Philippe Ivernel はその論文の中で、人民戦線の挫折による危機の時代を、ベンヤミンが〈今〉としていかに考察したかについて論じている。ベンヤミンと一九三〇年代パリについては今後さらに論ずる余地があるだろう。Philippe Ivernel, 《Paris, capitale du Front populaire ou la vie posthume du XIXe siècle》 dans Walter Benjamin et Paris, Cerf, 1986.

(29) 多木、前掲論文、一三頁。

(30) T・W・アドルノ宛ベンヤミン書簡（パリ発信、一九三五年五月三一日付）著作集第一五巻、一三九頁。

(31) ルイ・アラゴン著、佐藤朔訳『パリの農夫』（思潮社、一九八八年）一九頁。

(32) 野村、前掲書、二三三頁。

(33) ショーレム宛ベンヤミン書簡（パリ発信、一九三四年一月一八日付）往復書簡、一四九頁。

(34) ユーラ・ラート宛ベンヤミン書簡（パリ発信、一九二六年四月八日付）著作集第一四巻、二三五頁。

(35) ベンヤミン「遊民の回帰」、著作集第一三巻所収、八二頁。

(36) 同書、八五頁。

(37) 同断片とほぼ同内容の一節が、「遊民の回帰」（著作集第一三巻八二―八三頁）に見い出される。

(38) ベンヤミン「遊民の回帰」、前掲書、八八―八九頁。

(39) ベンヤミン『パサージュ論』、岩波版邦訳第三巻末の三島憲一氏による解説も参照のこと。

(40) 同断片とほぼ同内容の一節が、「遊民の回帰」（著作集第一三巻八五―八六頁）に見い出される。

(41) 本論註（2）参照。

（一九九五年八月記）